

翌日はイースター。通常二人は新教の礼拝に出るが、アンドレアは、この日だけは大学のメモリアル・チャーチで午後四時三〇分に行われるカトリックのミサを選んだ。カトリックである夫への顧慮と、タケちゃんの冥福を祈るためにも、お説教よりもミサの音楽を聞きたいと言う思いが重なっていた。午後のミサで朝が自由になる、前夜の心の動揺もまだ落ち着かない、もつと夫と話を続けたいという気持ちもあつた。いつもは話題に豊富な夫はその朝無口に近かった。何かを考え込んでいたらしい。

その翌夕アルフォンゾがカスタネットを二組揃え、ギターとバグパイプのレコードをかけて、ダンスしようよ と誘った。「あたし身ごもっているのに」とアンドレアは躊躇したが、いざ始めると足が神妙に音楽について動いた。両手を頭より少し上に挙げ、カスタネットを鳴らす。テンポははやい。このダンスはホタアラゴネサと言って生まれ故郷バレンシア特有のだよ とアルフォンゾが誇らしげに説明する。一二世紀にそこから追い

出されたムーアの詩人が発明したそうだ。ダンスが終わるとアルフォンゾはと言って、二人とも外に出た。散歩しよう星が輝いている夜だった。銀河を指して「そのお隣にアンドロメダ座がある」とアルフォンゾがぼつぼつ話し始めた。「今よく見えないが大星雲で独立した銀河なのだよ。僕は君に初めて会った時から片思いをして、その星座をアンドレア座と名付けていた。去年の十一月の或る晩、もしアンドレア座がはっきり見えたら、君にプロポーズしよう決心して外に出たら、それより美しい夜空はなかった。次にペガサズ座が目に入り、天馬が僕に早くこれに乗ってアンドレアの所に行きなさいといってくれた。うれしかったよ。」

「まあ、あなた素敵なロマンチスト」とアンドレアが軽く夫の右頬にキスした。

スタンフォードの春の宵は美しい。風が軽く頬をなでてくれると、かすかに新緑の匂いが漂ってくる。春宵一刻値千金 とはそれを指すのだろう。しばらく歩くと宝石商のショーウィンドが目の前に現れた。アンドレアの左手を硬く握って、「ここでリングを買ったのだよ」と夫が誇らしげに言う。お菓子屋さんはまだ開いていたので、それぞれ好きなペーストリーを求めてベンチに座り、それを食べた。星空の下での二人だけの世界だった。束縛から解放されたかのように、「僕ナタリアのこと君に話したこと一度もなかったね。僕の幼友達で、小学校四年生まで一緒に、同じ教会に通っていた」とアルフォンゾが告白じみた声で話し出した。「あのダンスも一緒にしたよ、君と同じダンスをして、それをきっかけに彼女の話をしよと思ったのだ。アンドレアは愛情のこもった、彼を詰る声ではなかった。まあひどい人と答えたが、

「しかし一家が他所の町に引越した後、音信が絶えてしまった。スペインは内戦の最中で、親しい人たちの間でも、お互いのことを詮索しない時だった。クリスマスのパジェントで彼女が MARIA、僕がヨセフだったこともある。いろんなことを思い出すよ。アメリカに来る前に風の便りで、ナタリアが結婚したことを聞いて悔しかった。僕の初恋の相手だったのだね。君と結婚した後でも、彼女

のことを思い出すことがある、そして、アンドレアすまんと自分に言い聞かせるのだ。しかし、君にそれを隠す必要はないし、君も僕にタケちゃんや武彦のことを隠す必要はない。どんなことがあっても僕は君を愛している。その気になったら、タケちゃんのことどんどん話してくれたまえ。お互いに秘密を一切持たないことにしよう。過去に間違いがあつたとすればお互いに赦しあえばいいのだから。」

彼の告白はアンドレアの自責の念を何とかして慰めようとする愛情から出ていた。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」なんと美しい言葉だろう。アンドレアはパウロのコリントの使徒への手紙の言葉の中に、夫の姿を見出した。そのような無私の愛によって愛される彼女は幸福だった。

話は随分後のことになる、私がナンシーを家に連れて、結婚したいことを告げた時のことだ。父母は私たちの決意を祝福した後、ただ一つ忠告があった。その言葉は今でもよく覚えている。「結婚するというのは二人の愛し合う人が一体になること。お互いの間に秘密があつてはいけません。すべてを隠さずに話し合いなさい。真理があなた方を自由にし、(罪の)束縛から解放してくれます。」それが私たちの家訓になっている。父母はこの家訓を自分達の間で忠実に実行していた。かりに母が父に妊娠していることを隠して結婚したと考えてみよう。「何だ、嘘をついたな、そんなこと隠せると思っているのか」から始まり、私が生まれると「お前の子だ、そんな奴自分で育てろ」と父が怒鳴ればまだましで、離婚訴訟が始まり、私たち三人それぞれみじめな生活を送らなければならなかったと思う。しかし母は正直者で、結婚の機会を他所にして真実を守った。「妊娠しているから」と言う拒絶の言葉は正しかった、それが父に私を自分の子として育ててもいいと考える機会を与え、家庭は常に円満だった。後で述べるように父母の間には実子がいなかった。不妊の原因は父にあつたが、母は常に武彦との交わりは夫への不倫であり、自分が不妊の原因だと考え込んで、苦悶に襲われていた、愛する夫に負い目を感じている記述が往々日記にでてくる。ここでそのすべてを紹介することは出来ないが、一つだけその例をあげておこう。

一九五六年八月二八日

明日トロちゃんが四つになる。あの可愛らしい顔を見ると、弟や妹がいればといつでも思う。随分お祈りをし、医者にも見て貰った。医者はアルフォンゾの幼い時のヘルニア手術がうまく行かなかつたからと説明するが、あたしはそれを信じない。だって責任はすべてあたしにあるのだから。「姦淫してはならない」という戒律をあたしが犯した。それであたしはもう身ごもれないのだ。慈悲深い神様は老齢で生まれず女のサライに男子を与えた。奇跡は神のみ旨に従うものに与えられる。あたしたちに子供が出来ないのは、あたしの罪が深く信心が浅いからだろう。今日も跪いで祈った。

「天にまします父上様、私の罪を赦して下さい。アルフォンゾは罪のないいい夫です。彼に私の罪を転嫁せずに、子供をお与え下さい。」あたしの祈りが何時叶えられるかしら。あたしは奇跡が起こることを信じている。